

## 秋田・洲崎遺跡<sup>すざき</sup>



(五城目)

- 1 所在地 秋田県南秋田郡井川町浜井川字洲崎
- 2 調査期間 一九九八年(平10)五月～一〇月
- 3 発掘機関 秋田県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 高橋 学・渡邊慎一・小山有希・工藤直子・山根勇人
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代、弥生時代、平安時代(九世紀)、中世(一三世紀～一六世紀)、近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

洲崎遺跡はJR井川さくら駅の北西約1km、八郎潟南東部に注ぐ井川河口域左岸、標高一m前後の沖積低地に立地する。八郎潟(干拓以前の湖岸)までは五〇m程の距離にある。現況は水田で、調査面積は二八〇〇m<sup>2</sup>である。調査区の

東端では南北方向の堀が検出され、またボーリング探査によりこの堀の西約二二〇m(調査区外)に同規模、同方向の溝状の落ち込みを確認している。このことから遺跡は堀によって囲まれた集落であり、その内部では地割に関連する溝、道路を多数検出した。また井戸三〇七基のほか、掘立柱建物・竪穴状遺構・土壙墓などの遺構も存在する。この集落の年代は一三世紀後半から一六世紀に及ぶ。

木簡は整理途中であるため数量は確定していないが、現時点で計一七点あり、その他に的など三点の墨書のある木製品が出土した。材質は肉眼観察ではあるがすべて杉と思われる。今回はその中から木簡二点を紹介する。

(1)は井戸SE五八七から出土したものである。この井戸は切断した丸木舟を井戸枠に転用したもので、枠の内部に井筒として曲物が埋設されている。木簡は井筒と枠の隙間に横向き状態で据えられていた。またこの井戸は、枠の外側から出土した縦板の年輪年代測定により、一二八六年以降に構築されたものと判明している。

(2)は東側の堀SD四九から出土した。この堀は幅約5m深さ約1mの規模で、遺跡の東端を南北に走っている。遺物としては、箸状木製品・漆塗り椀・下駄など多量の木製品、陶器類が出土している。またこの堀からは、的の一部が出土している(直径二・三mm、厚さ六mm)。中心には径三mmの貫通孔がある。コンパスのようなもので同心円状の刻線を施し、その間に三重の縞状に墨を入れている。

短冊状に加工されており、転用材として使用されていた可能性がある。

8 木簡の釈文・内容

井戸SE五八七



(1)



(2)

(1)

「アヲツタナヤ□□□  
くニトテ候へ」

(僧侶の絵)

(人魚の絵)

「そわ可」

806×145×5 011

堀SD四九

(2)



185×29×4 051

(1)は若干の欠損箇所が認められるが、ほぼ原形を留めているものと考えられる。板の上半にのみ文字と絵が書かれている。文字は三

行あり、絵は上に僧侶、下に人魚が描かれている。当時、凶兆と捉えられることの多かった「人魚」に対し、除災の供養をしている様子を描いたのではないかと推測される。なお文末の「そわ可」は梵語で「成就」を意味する。  
(2)は上端を尖らせた木簡で、原形を留めている。墨書は片面のみに見られるが判読不能である。  
(工藤直子)